

年齢と性別が地域愛着に及ぼす影響

日 比 優 子

要約

本研究の目的は、年齢と性別によって地域への愛着にどのような差が生まれるのかを検討することである。地域愛着の程度を測定するために地域愛着尺度を用いるが、より詳細に調査対象地域への愛着を調べるため、インタビュー調査も行った。国外の研究においては年齢と性別による地域愛着の影響を検討したものはあるが、日本国内の研究はない。地域愛着には空間スケールの違いなど場所の特性も影響することが示されているため、その地域の特性により結果に違いが出ることが予測される。本研究では、高齢者と大学生を対象に、静岡市中心市街地への地域愛着の程度を調べた。その結果、以下の三点が明らかになった。まず、大学生よりも高齢者の方が、また男性よりも女性の方が、地域愛着（選好）得点が高かった。次に、大学生男性より大学生女性の方が、また大学生男性よりも高齢男性の方が、地域愛着（感情）得点が高かった。最後に、大学生よりも高齢者の方が地域愛着（持続願望）得点が高かった。これらの結果から、当該地域への愛着醸成のためには、年齢と性別に応じたその地域独自の試みが重要であることが示唆された。年齢と性別に応じた愛着醸成促進プログラムを提案する。

キーワード：地域への愛着、高齢者、大学生、性差、静岡市中心市街地

問題と目的

超高齢化社会の到来に伴い、身体機能や認知機能が低下しても、高齢者が生活の質を維持しながら住み続けられる住環境が求められている。加齢によって身体機能や認知機能が変化し、住環境の改変が必要な事態になっても、現実的にはなかなか新しい住環境に適応できない。特に高齢期になってからの住環境の変化や生活拠点移動には多くの場合困難が伴う。新しい環境の中では、自分の部屋の中の空間だけでなく、自分の家を中心とした地理空間がなかなか覚えられず必要な情報や場所にアクセスできない状況や、自分で管理コントロールできない状況が多くの場面でみられる。これらは心理学では注意機能と遂行機能とよばれ、加齢により一部は低下することが知られている（熊田・須藤・日比, 2009）。

これまで主に地理学や社会学などで注目されてきた概念が“場所への愛着（place attachment）”である。場所への愛着は、Low and Altman（1992）による“人間と場所との間の感情的な絆またはつながり”という定義が多くの研究でみられる（園田, 2002）。このような場所への愛着がも

たらず効果は、個人と住環境との間の肯定的なつながりが心地よさや安心感を生むとされている (McAndrew, 1998)。地域への愛着がもたらす具体例として、小さな町にある公園や学校などへの清掃活動と心理行動的要因との関連を調べた研究では、地域への愛着に関連する心理行動が、町の清掃管理に主に影響していることが示されている (Rice & Miller, 1999)。

地域への愛着（以下、地域愛着）については様々な要因との関連が報告されている。Hidalgo and Hernandez (2001) は、177人のインタビューから、地域愛着は女性の方が強く、高齢の方が強くなるという結果を示している。それ以外にも居住年数との関連として、同じ地域に長期間住むほどより強い愛着を感じるようになることも示されている (Kasarda & Janowitz, 1974)。一方、日本国内において、加藤・岡田・加藤・吉村 (2008) によると、近隣住民とのつきあいがうまくいっている高齢者は、愛着場面数が多い。また、大谷・芳賀 (2003) が都内の高齢者の交通手段利用と地域感情の関連について報告しており、主な交通手段によって地域愛着の高低が変化することを示した。さらに鈴木・藤井 (2008) は地域愛着を選好・感情・持続願望の3要素に分類した上で、地域愛着が高いほど地域での活動に熱心であることを明らかにした。園田 (2002) によると、地域愛着という概念はアメリカ社会の高い流動性と深く関わる問題意識を含んで発展したという経緯をもちながら、日本国内の研究は少ない。さらに、空間スケールの違いなどの場所の特性も影響することも示されているため (Hidalgo & Hernandez, 2001)、地域愛着はその地域の特性により結果に違いが出ることが予測される。本研究では静岡市中心市街地（以下、当該地域）で質問紙調査およびインタビュー調査を実施する。静岡市中心市街地活性化計画 (2009) によると、当該地域は、小売商業商店、飲食店・宿泊業、公共公益施設が集積しており、静岡県内最大規模の広域商圈が形成されている。一方で居住人口は、静岡市全体の人口がここ20年間ほど横ばいであるにもかかわらず、当該地域では10数パーセント減少している。中でも高齢者人口が増加し乳幼児人口が減少傾向にある少子高齢化が進行していることが問題となっており、少子高齢化の問題を抱える地域の実態を探る意味でも本研究には意味がある。

本研究では、静岡市中心市街地を“当該地域”とし、特に年齢と性別によって地域愛着にどのような差が生まれるのかを検討する。すでに述べたHidalgo and Hernandez (2001) では、年齢と性別の違いを検討し明らかにしているが、日本国内の研究において年齢と性別を主な目的とした研究はない。乾・長ヶ原・岡田・近藤・増本・竹中・朴木 (2014) は、幅広い年齢の地域住民に対し大規模調査を行い、重回帰分析で地域愛着についての規定要因の因果関係および各因子についてそれがどのような変数に影響されるかという点に着目した。しかし、年代による影響の検討は不十分であったことを乾ら (2014) が指摘している。また年齢と性別について大谷・芳賀 (2003) では触れているが、各交通手段ごとに年齢差や性差がみられることを述べたのみである。したがって、本研究でインタビュー調査も加えたことでこれまでの日本国内の研究と比べてサンプル数は少ないが、年齢と性別要因に重点を置くことは意味がある。本研究の地域愛着の程度においては地域愛着尺度 (鈴木・藤井, 2008) を用いて測定し、さらにより詳細に当該地域への愛着を調べるため、インタビュー調査も実施する。本研究における地域愛着の定義は、「人間と場所との間の感情的な絆また

はつながり」(Low & Altman, 1992)をベースとし、鈴木・藤井(2008)および乾ら(2014)にならない、「人間と地域との感情的なつながり」とする。また、鈴木・藤井(2008)および乾ら(2014)は「地域愛着(選好)」を「個人的な嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する程度を意味するもの」、「地域愛着(感情)」を「当該地域に対して慣れ親しんだものに深く魅かれ、離れ難く感じる程度を意味するもの」、「地域愛着(持続願望)」を「地域の在り方そのものに対して“願い”を抱くという地域愛着を意味するもの」としており、本研究でも同じ尺度を使用することからこの定義を用いるものとする。

方法

調査対象者 大学生14名(男性5名、女性9名;平均年齢20.3歳(19-22歳))および高齢者20名(男性10名、女性10名;平均年齢69.8歳(65-75歳))を対象とした。居住地域はすべての調査対象者が静岡県内であったが、当該地域に住んでいる者は大学生1名のみであった。しかし後述するようにすべての調査対象者が当該地域を生活圈または通学・通勤圏としていた。

調査対象地域 当該地域とは、JR静岡駅および静岡鉄道新静岡駅およびその周辺の区域、駿府城跡である駿府公園およびその周辺の区域、JR静岡駅北西側の行政機関、病院、百貨店などが集積する区域、JR静岡駅北東側の公共施設、商店街、学校などが集積する区域、JR静岡駅南側の商店街、ホテル、公園などが集積する区域の、総面積約250haであった。

質問紙の構成 フェイスシート項目:年齢、性別、居住地域(当該地域またはそれ以外)を尋ねた。また、乾ら(2014)で地域愛着に影響があるとされた以下の項目について尋ねた。治療中の病気の有無、喫煙習慣の有無、ボランティア・社会奉仕活動の参加度(4件法)、地域団体の活動や行事への参加度(5件法)、近所付き合いはうまくいっているか(3件法)、友人との付き合いはうまくいっているか(3件法)、現在の住宅の居住年数、当該地域の歳をとってからの住み心地の良さであった。

地域愛着尺度(鈴木・藤井, 2008):地域愛着(選好)、地域愛着(感情)、地域愛着(持続願望)の3因子からなり、すべて5件法で合計13項目であった。それぞれの項目例は選好因子は「地域にはお気に入りの場所がある」など6項目、感情因子は「地域は自分のまちだという感じがする」など5項目、持続願望因子は「地域にはいつまでも変わって欲しくないものがある」など2項目であった。

インタビュー調査内容 当該地域に行く頻度、3年前と比べて当該地域に行く頻度の増減およびその理由、当該地域に行く目的、当該地域の好きなところおよびその理由(もの、人、イベント、場所)、当該地域を他の地区や都市と比べてどう思うか、当該地域への要望を尋ねた。

手続き 大学生は静岡県内の私立大学構内、高齢者は当該地域の無料休憩所にて、比較的静粛な時間と場所を選んで実施した。すべての調査対象者に対して、質問紙調査を実施した後、インタビュー調査を実施した。所要時間は45分程度であった。

結果

調査対象者の属性 表1に、治療中の病気の有無、喫煙習慣の有無、ボランティア・社会奉仕活動への参加度、地域団体の活動・行事への参加度、近所付き合いはうまくいっているか、友人との付き合いはうまくいっているか、現在の住宅の居住年数、当該地域の歳をとってからの住み心地について、年齢と性別ごとに人数および割合(%)を示した。治療中の病気については、大学生は全員無し、高齢者は5割以上が有りで、年齢差がみられた。喫煙習慣については、大学生は全員無し、高齢者も8割以上が無しと回答した。ボランティア・社会奉仕活動への参加度については、大学生の5割以上が「全然したことがない」および「ほとんどしない」と回答したが、高齢者の5割以上が「ときどきする」および「よくする」と回答し、年齢差がみられた。地域団体の活動・行事への参加度については、大学生男性の6割以上が「参加したくない」と回答する一方、高齢者女性の9割は「参加するようにしている」と回答し、年齢差および性差が認められた。近所付き合いはうまくいっているかについては、高齢者の男女ともに9割以上が「そう思う」と回答したのに対し、特に大学生男性の「そう思う」と回答した割合が低かった。友人との付き合いはうまくいっているかについては、年齢性別に関わらず6割以上が「そう思う」と回答した。現在の住宅の居住年数は大学生よりも高齢者の方が居住年数が長い人の割合が高かった。当該地域の歳をとってからの住み心地については、年齢性別に関わらず5割以上が「まあよい所といえる」と回答した。

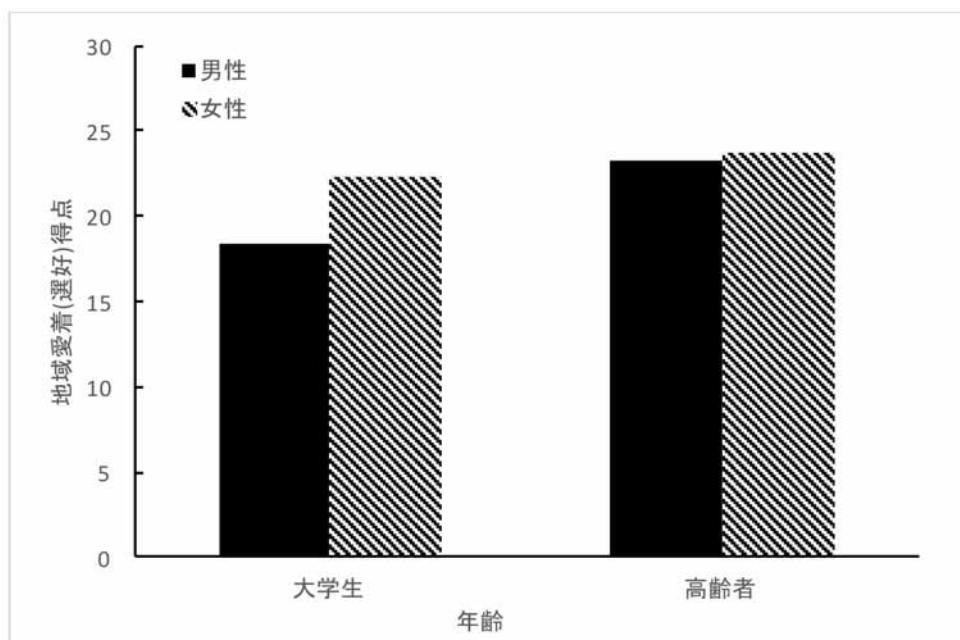


図1 各群の平均地域愛着選好得点

表 1 調査対象者の属性

項目	カテゴリー	年齢と性別			
		大学生		高齢者	
		男性	女性	男性	女性
治療中の病気	有	0 (0%)	0 (0%)	8 (80%)	6 (60%)
	無	5 (100%)	9 (100%)	2 (20%)	4 (40%)
喫煙習慣	有	0 (0%)	0 (0%)	2 (20%)	1 (10%)
	無	5 (100%)	9 (100%)	8 (80%)	9 (90%)
ボランティア・ 社会奉仕活動への参加	全然したことがない	1 (20%)	0 (0%)	1 (10%)	4 (40%)
	ほとんどしない	2 (40%)	5 (55.6%)	3 (30%)	1 (10%)
	ときどきする	2 (40%)	4 (44.4%)	3 (30%)	5 (50%)
	よくする	0 (0%)	0 (0%)	3 (30%)	0 (0%)
地域団体の活動・ 行事への参加	参加したくない	3 (60%)	2 (22.2%)	1 (10%)	0 (0%)
	参加したいができない	2 (40%)	2 (22.2%)	2 (20%)	1 (10%)
	参加するようにしている	0 (0%)	4 (44.4%)	4 (40%)	9 (90%)
	だいたい参加している	0 (0%)	1 (11.1%)	2 (20%)	0 (0%)
	いつも参加している	0 (0%)	0 (0%)	1 (10%)	0 (0%)
近所付き合いはうまく いっているか	そう思う	1 (20%)	5 (55.6%)	9 (90%)	10 (100%)
	どちらでもない	1 (20%)	2 (22.2%)	1 (10%)	0 (0%)
	そう思わない	1 (20%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	無回答	2 (40%)	2 (22.2%)	—	—
友人付き合いはうまく いっているか	そう思う	3 (60%)	7 (77.8%)	7 (70%)	10 (100%)
	どちらでもない	0 (0%)	0 (0%)	3 (30%)	0 (0%)
	そう思わない	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	無回答	2 (40%)	2 (22.2%)	—	—
現在の住宅の居住年数	1～4年	2 (40%)	4 (44.4%)	0 (0%)	2 (20%)
	5～14年	1 (20%)	0 (0%)	1 (10%)	1 (10%)
	15年～24年	1 (20%)	5 (55.6%)	3 (30%)	5 (50%)
	25年～34年	1 (20%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	35年以上	0 (0%)	0 (0%)	6 (60%)	2 (20%)
当該地域の歳をとって からの住み心地	全然良い所ではない	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
	あまり良い所ではない	1 (20%)	3 (33.3%)	0 (0%)	1 (10%)
	まあよい所といえる	3 (60%)	5 (55.6%)	6 (60%)	6 (60%)
	とても良い所である	1 (20%)	1 (11.1%)	4 (40%)	3 (30%)

鈴木・藤井（2008）にならい、地域愛着尺度を3因子に分け、従属変数をそれぞれの因子の総和得点として分析を行った。図1には地域愛着尺度の選好因子の得点を、男女に分け年齢ごとにプロットした。大学生よりも高齢者の方が選好得点が高く、男性よりも女性の方が選好得点が高かった。この得点について、年齢（大学生・高齢者）×性別（男・女）の2要因の分散分析を行った結果、年齢の主効果が有意、性別の主効果は有意傾向であり、交互作用は有意ではなかった（それぞれ、 $F(1, 30)=7.26, p=.01$ ； $F(1, 30)=3.18, p=.08$ ； $F(1, 30)=2.09, n.s.$ ）。

図2には地域愛着尺度の感情因子の得点を、男女に分け年齢ごとにプロットした。年齢および性別に応じて違いがみられた。この得点について、年齢（大学生・高齢者）×性別（男・女）の2要因の分散分析を行った結果、年齢の主効果が有意であり、性別の主効果および交互作用が有意傾向であった（それぞれ、 $F(1, 30)=15.86, p=.0004$ ； $F(1, 30)=3.71, p=.06$ ； $F(1, 30)=3.71, p=.06$ ）。多重比較を行ったところ、大学生においてのみ男性より女性の方が感情得点が有意に高く $p=.02$ ）、男性においてのみ大学生より高齢者の方が感情得点が有意に高かった（ $p=.0005$ ）。

図3には地域愛着尺度の持続願望因子の得点を、男女に分け年齢ごとにプロットした。大学生よりも高齢者の方が持続願望得点が高かった。この得点について、年齢（大学生・高齢者）×性別（男・女）の2要因の分散分析を行った結果、年齢の主効果が有意傾向であり、性別の主効果および交互作用は有意ではなかった（それぞれ、 $F(1, 30)=3.21, p=.08$ ； $F(1, 30)=0.37, n.s.$ ； $F(1, 30)=1.12, n.s.$ ）。

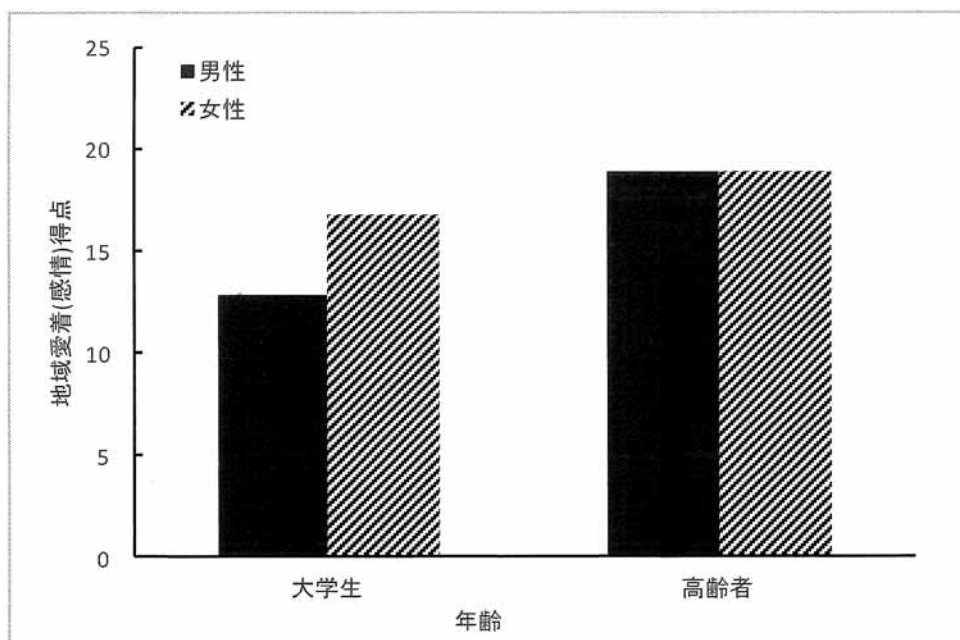


図2 各群の平均地域愛着感情得点

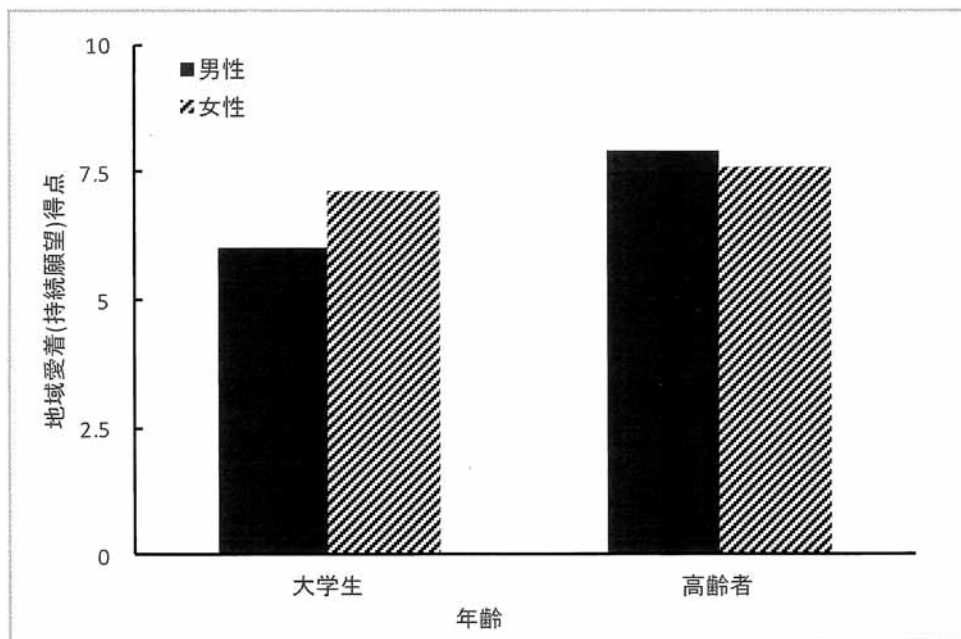


図3 各群の平均地域愛着持続願望得点

主なインタビュー結果を表2に示した。当該地域に行く頻度（回／月）と当該地域に行く頻度の増減を年齢と性別ごとに人数および割合（％）を示した。当該地域に行く頻度は、大学生男女と高齢者男性は0～3回が5割以上で最も高かった。うち0回は高齢者男性1名のみであり、ほぼすべての調査対象者が当該地域を生活圏としていたと言える。一方、当該地域に行く頻度の増減については、大学生は男女ともに5割以上が「増えた」と答えたのに対し、高齢者は「変わらない」および「減った」と答えた割合が8割を超え、年齢差がみられた。当該地域に行く目的は、加藤ら（2008）にならい、生活基本、趣味・習慣、交流の3タイプに分類した（ただし、加藤らはこれに「印象」を加えた4タイプである）。また、一人が複数回答することがあったため、年齢と性別ごとに総回答数およびその割合（％）で示した。具体的には、生活基本とは買い物や通院など生活の基本となるものであった。趣味・習慣とは、映画や散歩、習い事のような個人の嗜好が反映されたものであった。交流とは、友人と会うや世間話などであった。大学生女性と高齢者男女ともに生活基本を目的とした回答の割合が最も高かったが、大学生は交流目的が続いて高いのに対し、高齢者男性は趣味・習慣目的が続いて高い結果となった。当該地域の好きなところは、もの、人、イベント、場所に分けて尋ね、一人が複数回答することがあったため、年齢と性別ごとに総回答数およびその割合（％）で示した。大学生よりも高齢者の方が、男性よりも女性の方が総回答数が多かった。さらに、もの、人、イベント、場所のうち、場所に関して具体的に答えた割合が高かった。この傾向は特に高齢者女性で顕著であった。

表2 インタビュー結果

項目	カテゴリー	年齢と性別			
		大学生		高齢者	
		男性	女性	男性	女性
当該地域に行く頻度 (回/月)	0～3回	3 (60%)	5 (55.6%)	8 (80%)	4 (40%)
	4～9回	2 (40%)	3 (33.3%)	1 (10%)	4 (40%)
	10回以上	0 (0%)	1 (11.1%)	1 (10%)	1 (10%)
	無回答	-	-	-	1 (10%)
当該地域に行く頻度の 増減 (3年前との比較)	増えた	5 (100%)	5 (55.6%)	1 (10%)	2 (20%)
	変わらない	0 (0%)	0 (0%)	5 (50%)	5 (50%)
	減った	0 (0%)	4 (44.4%)	4 (40%)	3 (30%)
当該地域に行く目的 (総回答数とその割合)	生活基本	2 (40%)	8 (72.7%)	9 (50%)	9 (47.4%)
	趣味・習慣	1 (20%)	1 (9.1%)	7 (38.9%)	5 (26.3%)
	交流	2 (40%)	2 (18.2%)	2 (11.1%)	5 (26.3%)
当該地域の好きなところ (総回答数とその割合)	もの	1 (17%)	3 (6.4%)	13 (22.8%)	16 (22.5%)
	人	1 (17%)	11 (23.4%)	10 (17.5%)	10 (14.1%)
	イベント	2 (33%)	7 (14.9%)	11 (19.3%)	11 (15.5%)
	場所	2 (33%)	26 (55.3%)	23 (40.4%)	34 (47.9%)

考察

本研究の目的は、年齢と性別によって地域愛着にどのような差が生まれるのかを検討することであった。地域愛着尺度を3因子に分け、従属変数をそれぞれの因子の総和得点として分析を行った。

個人的な嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する程度を意味する選好得点においては、大学生よりも高齢者の方が得点が高かった。これは、Hidalgo and Hernandez (2001) の場所への愛着は高齢の方が強いという結果と一致している。また、表1に示すように本研究においても大学生よりも高齢者の方が居住年数が長い。同じ地域に長期間住むほどより強い愛着を感じるようになることから (Kasarda & Janowitz, 1974)、居住年数も選好得点が高くなった要因であろう。さらに、選好得点は、男性よりも女性の方が高かった。これもHidalgo and Hernandez (2001) の女性の方が地域愛着が強くなるという結果と一致し、日本国内の地域愛着においても同様のことが言えることを示した。選好因子の質問項目に「地域にはお気に入りの場所がある」があるため、インタビュー調査による当該地域の好きな場所についてみる (表2)。結果、大学生よりも高齢者の方が、男性よりも女性の方が、より多く好きな場所に関して具体的に答えた割合が高かった。お気に入りの場所の存在が、当該地域の肯定的な評価に影響しているのではないかと考えられる。特に高齢女性についてはこの傾向が顕著であった。しかし、インタビュワーが大学生であったことも

あり、調査対象者のうち高齢女性がインタビュー場面でもっとも多弁であることが影響した可能性もある。

当該地域に対して慣れ親しんだものに深く魅かれ、離れ難く感じる程度を意味する感情得点においては、大学生においてのみ男性より女性の方が得点が高かった。インタビュー調査による当該地域に行く目的をみても（表2）。結果、大学生において、男性よりも女性の方が買い物や通院など生活の基本となることを当該地域へ行く目的としていた割合が高かった。このことから、大学生女性では生活基本となる小売商業商店や公共公益施設の存在が、地域から離れ難く感じる程度を増大させるのではないかと考えられる。また、男性においてのみ大学生より高齢者の方が感情得点が高かった。これは地域団体の活動・行事への参加度および近所付き合いをみても（表1）。地域団体の活動・行事への参加度については、大学生男性の6割が「参加したくない」と回答する一方、高齢者男性の7割は「参加するようにしている」などと回答し、年齢差が認められた。一方、ボランティア・社会奉仕活動への参加度については年齢による影響はみられなかった。近所付き合いがうまくいっているかについては、高齢者男性の9割が「そう思う」と回答したのに対し、大学生男性の「そう思う」と回答した割合が2割と低かった。このことから、高齢者男性では、地域団体行事活動への参加および近所付き合いが、地域から離れ難く感じる程度を増大させるのではないかと考えられる。この解釈は、地域愛着が高いほど地域での活動に熱心であることを明らかにした鈴木・藤井（2008）と一致する。しかし鈴木・藤井（2008）の調査対象者は平均年齢が54.7歳と比較的高齢であったことから、この傾向は高齢者に限られ、若年層には適用できないものであることが本研究から示唆される。

地域の在り方そのものに対して“願い”を抱くという地域愛着を意味する持続願望得点においては、大学生より高齢者の方が得点が高かった。また、表1に示すように本研究でも大学生よりも高齢者の方が居住年数が長い。同じ地域に長期間住むほどより強い愛着を感じるようになることから（Kasarda & Janowitz, 1974）、居住年数も持続願望得点が高くなった要因であろう。持続願望の質問項目に「地域にはいつまでも変わって欲しくないものがある」ことから、インタビュー調査による当該地域に行く頻度、3年前と比べて当該地域に行く頻度の増減およびその理由に注目した（表2）。すると、現在の当該地域に行く頻度には年齢差と性差は認められなかったが、当該地域に行く頻度の増減については、大学生よりも高齢者の方が当該地域に行く頻度が減った。さらにその理由として大学生より高齢者の方が当該地域の変化に対する否定的な意見が多く、「当該地域内の店舗が、新しくできた大型郊外店よりも魅力的でなくなった」などが挙げられた。当該地域に行く頻度が減った高齢者を当該地域へ戻す試みが必要ではないかと考えられる。加藤ら（2008）によると、近隣住民とのつきあいがうまくいっている高齢者は、愛着場面数が多い。本研究でも、近所付き合いがうまくいっているかについては、高齢者の男女ともに9割以上が「そう思う」と回答したのに対し、大学生が「そう思う」と回答した割合は低かった（表1）。このことから、高齢者が近隣住民と集える場所を当該地域に設定することが愛着醸成につながるのではないかと考えられる。

本研究では、年齢と性別によって地域愛着にどのような差が生まれるのかを検討した。まず、大

学生よりも高齢者の方が、個人的な嗜好の観点から当該地域を肯定的に評価する程度が高かった。インタビュー調査から、特に高齢女性に対して、もの・人・イベントよりもお気に入りの場所を当該地域に増やす試みが効果があると期待される。次に当該地域に対して慣れ親しんだものに深く魅かれ、離れ難く感じる程度は、大学生においてのみ男性より女性の方が高く、男性においてのみ大学生より高齢者の方が高かった。大学生女性では生活基本となる小売商業商店などの存在が、当該地域への親しみを増すことにつながる可能性が示唆された。また、高齢男性では、地域団体活動・行事への参加および近所付き合いが、地域から離れ難く感じる程度を増大させることにつながると考えられる。続いて、地域の在り方そのものに対して“願い”を抱く程度は、大学生より高齢者の方が高かった。インタビュー調査から、高齢者が近隣住民と集える場所を当該地域に設定することが愛着醸成につながる可能性が示された。また全般的に地域愛着が低かった大学生男性においては、友人付き合いがうまくいっているかについては他の群と変わらず高く、また当該地域に行く目的で「交流」を主な目的としていることから、友人と交流する場所を当該地域に設定するという愛着醸成プログラムを提案する。小俣（2007）によると、地域愛着の形成に関与して、地域住民が試み可能な条件に、自己表出行動がある。自己表出行動とは、空間を自分に合うように作り変えたり、それによって自己を表現したりする行為とされる。本研究では、年齢と性別に応じた、当該地域に設定する空間に必要な自己表出行動のいくつかを提案した。もの・人・イベントよりも具体的な場所の設定、近隣住民や友人との交流の場の設定などがそれにあたると考えられる。本研究の成果が、当該地域の活性化の一助となることを期待する。

引用文献

- Hidalgo, C., & Hernandez, B. (2001) Place attachment: Conceptual and empirical questions. *Journal of Environmental Psychology*, **21**, 273-281.
- 乾順紀・長ヶ原誠・岡田修一・近藤徳彦・増本康平・竹中優子・朴木桂緒留（2014） 都市部高齢化地域居住者の地域愛着に関連する要因について－尺度と構成因子別の分析より－. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, **8**(1), 1-10.
- Kasarda, J., & Janowitz, M. (1974) Community attachment in mass society. *American Sociological Review*, **39**, 328-229.
- 加藤悠介・岡田亜実・加藤尊士・吉村祐一（2008） ひとり暮らし高齢者の近隣環境への愛着に関する実態調査. 豊田工業高等専門学校研究紀要, **41**, 121-126.
- 熊田孝恒・須藤智・日比優子（2009） 高齢者の注意・ワーキングメモリ・遂行機能と認知的インターフェース. 心理学評論, **52**(3), 363-378.
- Low, S.M., & Altman, I. (1992) Place attachment: a conceptual inquiry. In Altman, I. & Low, S.M. (Eds.) *Place attachment*. New York: Plenum Press, 2.
- McAndrew, F.T. (1998) The measurement of ‘rootedness’ and the prediction of attachment to hometowns in college students. *Journal of Environmental Psychology*, **18**, 409-417.
- 大谷華・芳賀繁（2003） 地域交通環境の利用が高齢住民の地域感情に及ぼす影響. 立教大学心理学研究, **45**, 1-9.
- 小俣謙二（2007） 住環境一人と住まい、地域の結びつきの研究. 佐古順彦・小西哲史（編）環境心理学, 113-122.
- Rice, T. M., & Miller, D. N. (1999) The correlates of small-town upkeep. *Environment and Behavior*, **31**, 821-837.
- 静岡市中心市街地活性化計画(2009) 静岡県静岡市.
- 園田美保（2002） 住区の愛着に関する文献研究. 九州大学心理学研究, **3**, 187-196.
- 鈴木春菜・藤井聡（2008） 地域愛着が地域への協力的行動に及ぼす影響に関する研究. 土木計画学研究論文集, **25**

(2), 357-362.

謝辞

本研究を行うにあたり、調査にご参加頂きました高齢者および大学生の皆様に感謝申し上げます。本研究を進めるにあたりご協力いただいたI Loveしずおか協議会の皆様と静岡大学教育センター須藤智先生に感謝致します。本研究は、平成27年度大学コンソーシアムゼミ学生地域貢献推進事業助成（「I Loveしずおか協議会」と連携した静岡市街地地域活性化プロジェクト（2大学連携））を受けて、地域における問題解決型学習（project-based learning）の一環で行われました。本研究の調査実施は、静岡英和学院大学人間社会学部人間社会学科3年佐野朋香さんと守屋圭貴さんが行いました。記して感謝致します。

